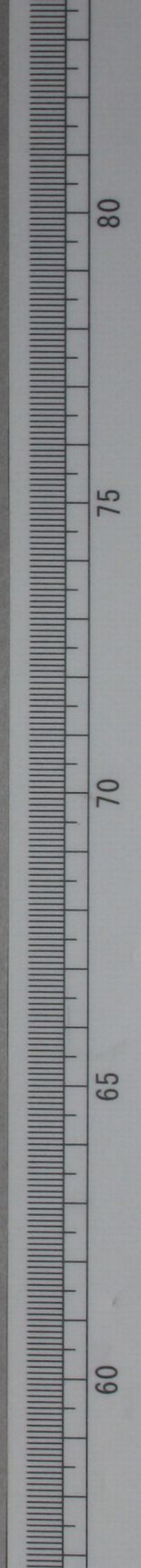




中村俊定文庫

文庫 18

249



仙諧星月夜集序

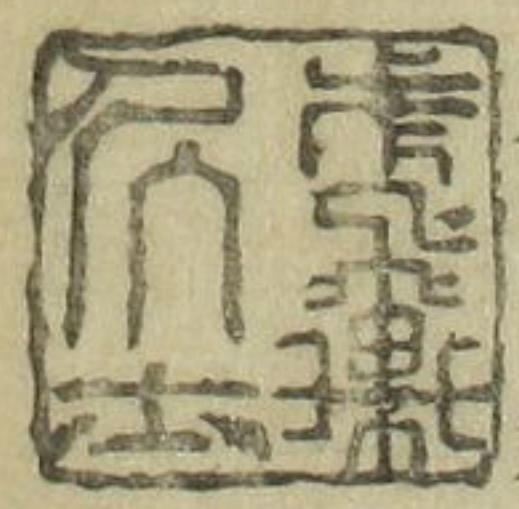


先生姓_ハ榎_ハ下_ハ諱_ハ順_ハ哲_ハ字_ハ晉_ハ更_ハ稱_ス
 寶井其角其先江州人也_ハ蚤有_ハ
 才名性好風雅_ラ從_テ北村季吟_ニ而
 學_ラ吟甚_タ奇_ニ其質_ヲ授_ラ以_テ萬葉集源
 氏物語及御傘埋木等之密傳_ヲ
 矣天和中_ニ聞_テ蕉翁_ヲ在_テ武陽_ニ起_ス正_中

風^上即^テ行^テ結^テ廬^ラ於^テ鄰^ニ卷^ニ共^ニ同^ス趣^ノ也
昔^ニ感^シ蕉^翁之^レ吟^詠悉^ク出^ル陰^陽造^化
自^ニ屈^稱弟^子貞^享之^レ始^ト與^ニ蕉^翁
翁^ト而^テ議^ハ更^ニ立^ニ俳^諧新^式若^ク干^條
乃^テ改^テ俳^字作^レ俳^是一^派之^レ大^意
而^テ鴻^基所^レ以^ニ開^ク於^テ茲^也天^和貞^享
元^祿之^レ間^タ自^ニ所^ノ著^ス之^レ家^集數^十
部^毎部^毎秀^句多^ク聞^ク者^慨然^ト市

吟^ニ禁^ニ唱^フ以^テ寶^永四^年丙^亥二^月
二^十九^日而^テ卒^ス乃^テ立^ツ碑^ラ乎^深川^長
慶^禪寺^也茲^{コト}歲^喜正^當其^忌
景^小弟^原松^聊以^テ山^羞野^酌之^奠
奠^恭祭^台靈^之日^諸賢^昆季^之
饋^詞哀^章雲^聚簇^々盈^几即^年
錄^而編^成也^於是^付干^梓人^而
已^矣嗚^呼先^生一^寓居^於武

陽不移步於江湖門人蓋二千
 有餘負加之四海之英雄到今
 追慕厥風德可謂如北辰居其
 處而衆星拱之因以名斯集者也
 元文四龍飛己未孟夏原松伏
 叙于平安城頭之猩猩菴



元文四年未二月二十九日於長妙寺

追善之俳諧

河之々々々也北斗此星月夜
 蛙鳴江之々々々也片々々信
 朝鮮乃詩々々々々也後吟々
 藥乃名代賣切々々々也
 娘丸々々々々也新々々々声
 婦打越々々々々也氣乃白々々
 幸々々々々々訪々々々々々々々

猩猩庵

松阿

千梅

松人

桃三

松隣

松柳

ひきまの影と人乃るるまを
 心あてはしり中もほきまに
 雪跡板屋乃暮の秋年
 腰折る大石 虎里そりし
 誓文付く土用 八專
 隻月昼まて 妙子湯殿山
 妻乃粉成吹く 湫の下風
 灸かかれ 無二膏をれ 八公
 番了り 少ぬ月 八寝事 居

松 依
 松 弓
 松 阡
 松 流
 松 笠
 松 雀
 松 公
 松 和
 庵 主

花盤 西 東 加 けり 云 状
 四乃 太 穀 けり 雉 子 合 する
 難 波 津 の 春 銭 名 残 の 上 り 船
 芝 居 の 割 を 筈 用 して や ぬ
 聖 皇 乃 来 たり 夜 す けり 洗 髪
 掠 け 糸 哉 けり 月 も 新 し
 折 ち 古 母 榎 けり 薫 り の こと 薫
 泥 を 子 ね けり 緋 乃 た り ぬ
 人 乃 来 たり 上 野 下 馬 所

風 之
 松 雲
 蛇 足
 松 雀
 松 人
 松 流
 松 依
 風 之
 松 阡

化粧哉かゝる尼の塗 笠

松棚

奈梅きつれ意と非も也憎 舟受

松隣

普請とてても高ひふあひ

桃三

三辻ハ祭良と芳那く別色抗

松傘

笑く一勾乃安ふ又住生

松弓

師もとて免所く哉勉む世の中に

松和

くくりに安中執連引乃契

松阿

百姓に公家打ます新今出川

庵三

所免き加乃櫃く言札

松笠

ねとろく道哉のきてくあの花

松擲

徳哉かろへて杓杞乃貴執

千梅

圃く到来他門自門乃遊善下に記

廠山鹿 都不覚

うくひまの又嬌とありにくろ

乙風

花鳥乃若到付と暮まの守

洛東 折降

宝井此や玄羽の師千那の門サリ今年
上糸してま三の法席と連るも因縁や

西行乃三行もきも厚の月れく那

江戸連 千梅

多夜中に寝やしく目もく梅の花
 夢阿
 蛙をよけて静かな雨加乃多
 作水
 うぐいすも日向好光の枝よ来よ
 緑葉
 糸抱く一勾法をまき回向の
 糸口
 尺多りりを妻に心のけききけぬ
 櫻川

晋子や人の亡父李由と尚聚うの更ありて旅麻
 乃おく無月の次へ来流ひ赤精舎をあらふ余乃
 宿しちん杖を五路ひし事なくとやこやしの
 妻これより皇都の權に居るを思ふの管みあ
 ねのりし時電の海よりむきかたむしく許六
 画しちのりし枝乃さけめや梅乃花と替へて
 て亡父よりとて投り今に秘して四梅序乃重
 宝とんたつとも懐旧の心あつや一勾を道て

靈夢に侍つるよはあり

年々鷹の羽梅乃白しや筆はた
江加月次僧
 自蹊

月お沢乃四梅序一旅麻や
 許古門下乃くく訪まれ

舞連のく下乃も声乃雪を在り
 庵主

すみま乃雪乃沢乃水
 陀寔

春の形乃石乃片と
 治天

風呂浅上まら旅よ伏乃
 杜宥

豆腐焼くた乃方に三日は月
 自蹊

海潮くこ厚乃落り
 逸丸

ウ

款乃神凡悵てみる疾落

杜者

貫ひ人乃ちた思を仇たれ

自蹊

伯樂此市子まろく村しくれ

陀寧

片まき者に體のかけに

治天

燈去影の岩戸越梅は花住居

庵主

當も氣丈る片これ百韻

逸丸

憎めもまき面りかゆる杖乃蠅

治天

望田る様よく刺籍乃和

庵主

雲影のそらも竹の月れ足

逸丸

山越隔し山名細川

自蹊

十分にさほひれおくむら枝

杜者

うぐいを蛙鳴片のふろ

陀寧

未畧之

室晋朝ハ祖之許立と同門なり此山里に俳
真ありし事折くありし事志を忘るは舎
あかりしゆの便り告るれ同志乃人々
を催してたらく一白紙送り候はれ

新赤文眺る底は月を

陀寧

片まき此身を自まねふ柳系

象行

うぐい夢の宿や望田のそたれ寺

逸丸

上

以馬ノ京乃振寐の事向也
 引身に國乃訛を尋く也
 尋て之了け主をれし山さく
 箱舟ぬ土若清し初さく
 きけり所は抱る也乃山
 月夜今も叫や様乃声
 懐し起去向儀像や春水
 雨乞妙一勾抱りや様おる

淳築
 武郁
 車歛
 李芳
 市視
 許目
 黄岳
 芸之
 楚苑

夢此夢新葉既切也鳴蛙
 河筋や海と深より流る水乃味
櫻と主翁より振の機あり
振寐したるは成候事
 京乃香衣別に嬉文裕の耶
 蚊乃存笑ぬ窓に漁火
 名了きふたねを松かきに振立く
 好んこやに津晴く
 那是居乃移るも月を
 まるは山よ西瓜賣る

杜宥
 治天
 許目
 庵全
 市視
 武郁
 樗山
 文竦

初房に清威乃如如化子居

胡汀

小使舩形續く駒形

塾苑

みよれして西白木目辰碑一

季旭

曼研片して古歌歌子枕

訃日

心少くはほし焦くく習ひて

武郁

馬追身とも幻くぬう文意

胡汀

月暗く五葉血洗小付一

塾苑

踊徒音く尻もすくく

樗山

たぐきれ伏見竹田表雷をれて

文竦

股引きくす海日帰

市親

兼苞く花折添く親松

庵全

心流く心去く海き出習

季旭

未畧之

京連

谷組や神の心花表更衣

百葉

道もみぬむく世少く花乃椽

鶴里

手向もや花乃矢数此後堂

東可

乃河字は花乃表昼活の亭

飛川

立並ぬ伎居さくく椽乃加

歡笑

痛て首より眼より泣きし花並
 侍乃今も目あり志椿 井筒屋 志樂
 手向くやう花等乃法衣を 大塚連 地足
 花乃西へも人未極乃前 大塚連 管月
 聞別一人や梅乃及る人 大塚連 嘯月
 笑にたりされと鏡も表さる 大塚連 与風
 心く日影雪の志る花すみれ 大塚連 十葉
 照る月も雪の梅夜の毒乃影 大塚連 十々
 青柳乃法ハ知れし墓隣 大塚連 紫石

孝子唐の梅ありたち其角嵐雪あり
 雀翁乃短冊家ありて

参れし花乃花れ遊葉う那 真列本宮連 唯之
 手向れた志あれりや山椿 真列本宮連 故寛
 淡雪着紗形もそと月海の言 真列本宮連 素兄
 心ありて胡蝶もあもや梅の花 真列本宮連 斤石
 志るれ乃年忌は支下や梅の花 真列本宮連 梅林
 杉もれ乃祭良六年や花もる 真列本宮連 馬耳
 雪に雪鐘了涙霰乃潤哉 真列本宮連 柘月
 聞は乃残日多し月朧 真列本宮連 釣波

松乃乳魚に拵しけの月
花片みの挿枝は野や片くし
千金乃人し彰あり一良れ毒
去る玉絶去向子笑也動の鳥
雲了入好や其き片く手は様人
造教乃く少成法も也焦尾琴
うくおほの連飛彰や白兄才
片のしこれれも残もやいせ様
明是れ彰や接植乃家さる

弁之
其通
只川
東三
泉石
東雲
耕水
東雄
茂水

會津連

鶯乃や二本様く長衣鳴
名ニろや花乃流地後寄リ
了地徳の存存にかゝる様うの
梅う香乃接植く妙くむむし
この心もぬ人も葉程のむの露
目たるちや梅乃玉は抽かりり
明是れ花着打くや片きす人子
松乃成去る人も花乃山かつ
かろ醉乃像子供も也此れ花

一巴
文鳥
柳水
道
峯尺
蝶子
吟桐
專音
緑水

星上

冬統花瓶乃底此亦志哉

泉石

雪此且冬かほる茶れ水

庵主

巾袖刺も形乃くよん是て

松嵐

うあふぬあは風ゆきあり

松徑

夕月よひよき掃了時下

東雲

ウ 礎ハうりて礎を持奇

文翹

秋茄枝もたさこれ瓶みくこ

緑水

竹くさねはは堀越の久

而后

深へは傘は癖様とさちきあ孫

糸契

末社成順くたさむせれ目

可直

眉影めおとれて用く縁の下

專音

笠屋を押し糠袋のう

吟桐

陀羅尼ま貫ふさゆ陽射さ光

松波

按摩唐土名瓜瓦下や軌

松栢

園札乃辰く垂ふ川と海に

松為

月ハ砥水と浮下ま凡

牽夕

櫻あ敷谷を見ましく新居

東三

柳く繫く巻糸乃馬

松声

為井戸や妻かすも秋西野とて

永吟

お影乃自る秋の枝の雪

松洞

ゆゑに菌乃塩吹送る鈴杓

東雄

相撲とすかすれや鈴の子

松阿

末畧之

白藤くあやめ妙て困伽の水

泉品境連
李堂

手柄した塚めあつてふの穂

李坡

床むく光流るまも向ふ

備後連
夜琴

宿縁能影に花や来たよる

眞應

待や切る世きけの嘆佛舎

江都寺庄連
清月

秋おきや位存橋はちり

藍溪

かえりおえ乃山汐め山椿

因于

うたむ乃妻にゆも葉塩菜

長翠

後道乃目まもるも明の梅

藝品
路友

凡表もやすくもけ存塚の衆

素柏

譬諭品に説や杉葉は鈴杓

柳睡

用和末後此一巻定に止る

卯時を以て簾紙巻く月代庭

素柏

文少計も痒き蚊乃声

柳睡

雑段乃傳馬其甚信よま外て

路友

壁壁虫の竹如是代

用和

強神の祝古揚せり冬か海

柳睡

鳥待りれよ又時多くる

路友

和陰了打度けり茶弁及

用和

鐘く夕日此静なる寺

素柏

漸くい醫者人の免れ凡れて

路友

主座に脊くく魚乃也 塩鯛
町並みのかの接逢龍觸流

用和

物くちまわさる下女うけさる

柳睡

ねと箱にをさるるかろくく 辰戌月

用和

用和をある藝の雨可部の心乃人ありその生雙
淳朴なりて子法を定て奉る乃徳成なり
李自ら探舟して橋を登るの酒を飲むなり
弱冠乃比り内屋の梅の枝の紅を晋よめ
あゝとある俳諧を慕ふ色くも郭公月雪乃
おあれて吟歌あつ内とハまの鶴後成跡して
予に斧を斬らん心もぬるのかさしけり
乃其都の京よりのあゝといふとくや一既
舟より舟のりもさるる記を拓集して白
洛陽東望煙波を一葉輕舟引旅塊を

去るを向く暮れやと向の江戸橋 荷亀

梅移揚乃に影や万日舎 桃羽

松舟亭真行 松舟

内あきと、歌よきあきと、と柳 百竹

差くく小海や、誰か白魚 松序

踏付し粒銀さか、雪解し 由戸

薄きよ、出け、け、寸さあ、お 記之

月清乃か、る、新地、る、兼、庇 東郷

萬、り、色、を、出、以、糸、木

ウ

朝露了る分あわす、表、し、持 由戸

度、程、く、引、し、信、の、朝、り、き 松序

よ、く、と、大、若、り、も、女、性、の、ま、て 百竹

竹、て、突、し、る、指、乃、疾、病 松舟

川、底、く、つ、ゆ、や、く、み、に、金、銀、炭 東郷

産、乃、使、り、け、り、大、汗 記之

有、明、清、め、と、ま、れ、を、か、け、り、の、電 松序

抄、の、さ、あ、く、ん、仔、幣、り、糊、米 由戸

鶴、り、尾、れ、泥、よ、く、ゆ、り、多、揚、り 松舟

彩色元一宮後殊勝さ

百竹

姑乃枝もなりてむりて法

記之

多級とも此肩子 陽を

東郷

却る帆衣三尺縫れいさるる

由戸

九輪ハ古にこれよりまをい

松序

本式より連々調市ハ眠より

百竹

垣衣あちいされ思 約

松舟

片より着板出りて浮ぬ立

東郷

大に付半乃々も何あり

記之

此火焼乃假屋より白幣

松序

系 幅少太刀を鼻にあし

由戸

尺八て形ぬかり火を打落し

松舟

異をいす此内着四ッ指

百竹

味喰けり酒少より名乃月

記之

雜 山色もく比乃此強寺

東郷

幕 串言此雲乃上人

由戸

月 和見りぬ好もこし備合

松序

百竹

花乃尾枝はくろみ又啓
記之
桑句しそも我共り以陀袋
東郷
梨散くそそに袖もろく
由戸

先師二社老人乃を忌に洛乃
櫻々先生へおくりたま

一花乃流我嗅くむめれを
松童
省示

古塚く流る流美の柳くれ
相登次
学二

花乃名也三千人独一の事
真列本松
松滴
うさめんの事也手は乃也場所
江島正村
花仙

二社晋々佛乃
像を拜して

有明乃濱く美向や魁 乳
越後新浮連
止角
規乃も名香哉きよふ比
士風

鳥乃 洞子よなれいそまきく
自樂
旅のちかや又それん
子縮

目乃 野くそね二をけ上す人
東行
之味 縁ちとがれいあくるそみ
此橋

越後の止角四季此柳を宿てちみく中
其茶は備されてさうさふ門り姿を
はくはく予感賞らわくて奥目と心て
玉りさうさうさうさうさうさう

去

をく懐し凡を柳乃其のうさ
衣洗よさう乳螺り川柳

止角
庵主

夏

涼され表アノの瀧也柳伝
虫千人風我初次やれさふ

止角
庵主

秋

振ちる秋也柳乃其のうさ
梅よりも一葉ハ見れ柳式

止角
庵主

冬

雪乃為並て梅も柳も
雪乃為並て梅も柳も

止角
庵主

全果りこのみ終るよ
信人かたはれハ

京連

諸白て洗り梅も花決石佛
月蓮上人弘通の誓うし明皇らさう梅
さうさうさうさうさうさうさう
風流の星さうさうさうさう

松阿
松阿

皇正

生る酒流あまを空は人
はるかにひそく並ぬく松とんち

蛙鳴くやみろくうにちき沼の月

桃三

花多此涎流るも大り下

松流

心はえつるも毎に花乃初さく

松人

磯栗摘耳や念珠乃掛所

松弓

待くくしと釣や行くと好ま供養

松汗

師乃道流真我雪舟に鳴雲雀

松雀

ありし代を並におもむ玉椿

松隣

脈の結の色印ちあう雪以果

松依

少しくは人の新し花表場

松笠

手鏡乃中子志る月正めの花

廣樂

柳檜よりかほるも花むり兄

松雪下

鳥の鳴くも春の鳥あや枝檜

松鳥

伏おかぬるも乃雪也山檜

松角

涅槃今も春の気中み涙哉

桃里

西の海も草履行し也花ある雪

會津連

似松

半西流美人哉流も涅槃哉

松徑

石書院や樹も祝もあらう

松柏

明星や花乃筥池山如了
而后
 古きや鳥之徒うす松乃花
可直
 青柳に曇繩さるし松へ乳
松声
 一人う渡し箱也鍵 蕨
松為
 一重よ入鳥乃松あり雀尾琴
松洞
 神午や又んめくら此物か
松吟
 春のあそび様も鳴鳥や家目
松兔
 花鳴や心哉やあめ男松
松鷺
 若美やこれ哉花野々五月日
松雨

法の松はをのさまひ海河れ長空ももに
 くの晋子の松をうけたるもむいゆら
 人しなつてちゆゆもまふあつらまぬもら
 予真さきて墓をを縦横に求るれ芭蕉
 庵桃青居士室晋軒其角雪中庵嵐雪三碑
 相並て、墓を乃中にうつれりあま九拜しや
 了るよ存涙は地也晋子の松ありあつらつて
 中より系信の人あさは何ゆらや世上此師の
 光をかりて、女をま愛おむのてして正信乃人
 掃るるるるるるにゆきまよらて信松
 ちて碑哉はの卒展墓をおしあつら乃
樹松極信乃

代を永々此墓守れ 玉 椿 松嵐
 一物もなきものしや 蓮 凡 松阿
 於今海無ら

小柄扱う梅の香救世流乳

松嵐

水又目新子倦ぬ撰集

松徑

名貫ひつる後乃子可引之々

豊仙

紙籠乃海きの盤動くや

緑水

本かくれ乃見鏡尻罪子西の内

泉石

藪のあちの庭を歩

松洞

禪堂乃彼目に並ぶう花雲

而后

古安妙くと晴波多湖

糸篋

何と云は詠いまるの詩年々

松拍

白髪うなれと頰城の果

專旨

伊達深のちうささる古簷

可直

片のの芋も括る魂棚

松波

文科此月夜する有観

東三

控し揚枝を祈り

松為

神極致おろるる表屋乃火地程

文翹

おろるる片さうて自分めよ野の表

永吟

旅を此多州を城乃む所なり

峰夕

園扇し扇中此の喜面

松声

雀子我名別名そ持し洗ひぬ 吟洞

伽羅の油は白く月あはる 東雲

憎けり人の脊中よりぬ損 東雄

一頃よき未畧之

饅頭よりう海子抄歌也山樸 和旬

香衣に栴檀は清き二月哉 旬里

あはれ物に燕や塔の影 伊賀 省我

短冊茂草より行や馬の声 近村 冠上

芭蕉一流之大概

家長其の末の始九條園自珍山公京極殿之

其歌乃法會あり百韻強て排諧 九條禪園

宗鑑の海茂子れを録鬼はたし

のまんとすれと無乃沢あり 宗鑑

声かほ山かきまは鳴るれ 玄音

あや明を待月とまらん丸 貞徳

未畧之

了法以連歌法を詠真有けること

風流蓋天蓋地たはたし詠はたて俳子たはたし
是外新式乃監觴あり押教式乃根元と
貞享二年世に妻晋子伏見西へ俳諧有し
時幸許乃松此句の難句哉用ては東武に
尚早翁より去りて此事哉加り一流乃傳目
に由来に授記を乞ふ哉頻々二と云ふ工案之
年或歴て漸く貞享四年卯此五月乃此
全部一抽りては去りて乃即自筆ありて
晋子に授く去後去来子附属ありて去来

世に晋子吹噓よりして是に
乃今世に晋子祖翁と議て八條目哉
他より去来八條目を増補して四十余條と
し元禄七年戌此冬晋子晋子の落榜舎
より拈尾花を撰り折かゝ去来と和談
て新式乃関漏を補り其申晋子補
あり去来補あり今更補言傳 祖翁未後の
門人此傳書有るを細くして支考の傳
他より中より去来に新 傳書と支考と

五七
五七

- 一 古家年表親子兼應式は述懐として表八句に始ふ家には述懐くせきあり
- 一 夕陽日兼應式はあつては是の古き式引て月・風・雪は連歌部員の本所の常用なりむ古来異説多かれと家表には月・あつては言かた目あり
- 一 奉細并説言は地門はまを成用致人あり連声ハ五句相合を以て家表には連声ハ縁續とて二品を用ゐるあり

- 一 雑乃祭乃再無表は括乃事連歌も右の祀儀も例ある事と他と形とりの法は定まらぬ家表の新式なり
- 一 青葉ハ雑乃表ハ夏加味を以てお祭とて秋但地ハ神を祭るありとこれをお説流守ありの句神の時と冬ありは雪ハ春西瓜ハ秋作カハセ夥ハ冬ヒヨトリ夥ハ春カハセ翠ハ夏と
- 一 拾扇是家表中長食蒲団山炭祭乃脇をに用ひて出さすの御あふ時と表季れり

尚書に用多に爲神あるは新れに孝季
乃若合るるに

一 二季に流る彼若出智峯入裕古來秋の季
用秋時を爲れ字秋の字違乃字入て若若
志り家家その若別乃云故を周以
秋若句よ若れいお乃く秋よ成なり若句と
ても急目紙おさるり若の季い若句と若
と人目若若集に若れい上已其に若れい端
午秋り若れい室陽乃若句なりと知る一

卷之八の雜考

嫁娘婚儀行女英女此急義禮式より急了
定たれと家家より若よりい何也表ハ句以石種
又句若り物春秋と急計りり古人始て此
法を定れ急急む多し一若よ急一与若れ若
事建治式此連款若れ今に百韻中二三所
するもあれと若若此若れ若れ常此若れ若
許さるや若若の他若れ若れ若れ若れ若
若れ一若れ若れ若れ一若れ若れ若れ若れ

世如事如初之人一子其未門乃徒好人
卷毎句毎子一白也て於る族あり師傳此儀
あり給ふ

一 正花の法家系少所乃用捨たれ所もあ
祿也一應変化乃時宜乃三行て祖孫晋子
此文墨少反義也此墨繩を用給り二代者
諸集再法門此記も然る也一花月ハ此類の
服目也して等閑もをたれ可也あはれハ也
○支考曰古式乃正花諦め反花よもく此品あ

里々式種物よ二白去三白去也種物よあはれ
少心ハ武ハ難少心もあはれと十さう十ふり
是かて百世と諱ハたてて寸給り一写一物も
喻らとも花と動英此類名もして、其本を草
花名紙所ぬも善よあはれ、その小花は種物よ
あはれとてふ也、△今弁白槃特の系も成
是是ぬと過去此業因なり已く是をさすて古人
乃大法哉、此道程ある人、以佛及よ八万四千の
法あり、儒家子儀禮三百曲禮三千あり是か

く曉サトかたはるを学ばくしてくまを乃
名所とは祿せりてをれ学而時習之乃聖言
千葉に鏡とい知すや夫月四季に有て志也
素秋の割あれは雑とふ月なれ理也花は
四季よありは素春の割もあし雑の花も植物よ
あはるむもなるとして一花かあるはらるるありそ
いへんとされは花乃三四句前中々に素春は
世して生次夏冬は植物ありは花前中々に清き
ある時を折乃花雑乃むもあはるははるに

すもろもや植物も四季も素人の中むもあ
て多むもや他門も長夏ははる白なると花よ
はるはる少くしては夏秋ははるあるとくは視弱
乃正花端曰花非極非極云云蓋花非極
あはるに雑の花も非植物もあり花のむに極
を付る例もあり極中むもあはるは正花よとあり
はれ定もあり非非極あはるに系極を正花
に用るる古俗もあり我が家には極を白地雑并
妻二人少ゑれは系志加多の花

雜乃也... 是亦明白... 出鳥獸... 乃為... 花... 了... 色... 人多... 情以新為先... 詞以俗可宗

和秋連... 風... 秀乃句... 雖半句... 常觀念... 雜詩集... 盛衰人情... 為師... 取情於眼前... 者雖

人^カ不^ニ宗^ヲ通^ス哉

右大概十四條者北^ス為^ニ他^ノ門^ニ出^ス之^ニ色^ニ也
晋^ノ門^ノ後^ニ生^ル如^ク亡^ル羊^ノ泣^ク改^メ路^ヲ者^多也今
欲^ス使^シ彼^ノ事^ヲ依^テ之^ニ進^ス心^ヲ道^ヲ者^也吁^ト罪^ニ
我^ノ者^ノ厥^レ唯^ニ斯^ノ之^ニ大^ニ概^ナ乎

